

引き抜き屋の帰還

雫井脩介

第二回

引き抜き屋の苦心（二）

（承前）

「もう、限界です。これ以上は無理です」

小穂は壁にへばりついたまま、悲鳴に似た声を上げる。

「大丈夫、大丈夫。まだまだ行けるから。今度は左のガバをクロスで取って」

下から畔田知行が声をかけてくる。

「ガバって何ですか？ クロスって何ですか？」

小穂は半泣きの体で、問い返す。小さな出っ張りにかけた両足がふるふると震えて覚束ない。

「左上の赤い大きなホールドを右手で取りなつてこと」

「右手で左って……そんな器用なことできません」

代わりに小穂は、右上のかろうじて手が届くところにある青い出

っ張りを取った。

「ああ、それ……まあ、いいや」畔田が仕方なさそうに言う。「じゃあ今度は、左足を黄色いホールドに移して」

「どれですか？」

からだ身体を支えているのに精いっぱい、下など見る余裕がない。小穂は左足を動かし、手探りならぬ足探りで出っ張りを探した。

「それぞれ」

畔田の指示通りに足をかける。

「次は右足。白のホールドにかけて」

「どこですか？」

「腰の横のほうにあるから、ちゃんと見て」

恐る恐る視線を落とすと、白い出っ張りが見えた。

「こんなとこまで上がりません」

「そこしかないから、がんばって」

「もう一回、下がって、やり直します」

「大丈夫。そこクリアすれば、行けるから」

かくこ覚悟を決め、左足に重心を移してから、右足を思い切り振り上げた。何とか引つかかった。

「そこから手で身体を引き上げるようにして、左足をもう一つ上に移そう」

「不可能です」

腕も足も左右に伸ばし切った形になっているので、まるで力が入らない。

「がんばれ、がんばれ」

畔田はそう励ましてくれるが、それもどこか無責任に聞こえてしまふ。

ヤモリのように、べたつと壁にへばりついていることしかできない。

指の感覚がなくなってきた。

限界だ。落ちる。死ぬ。

「やっぱり駄目か」

畔田のあつさりしたあきらめの言葉と同時に、出っ張りをつかんでいた手が滑り、小穂は悲鳴を上げながら、お尻からマットに落下した。

「いやあ、ただ壁を登るだけなのに、ボルダリングって、やってみると奥が深いですね」

汐留しおどめのスポーツクラブ「ガルウイングジム」で畔田と一緒にボルダリングに挑戦したあと、小穂たちは近くのカフェに寄った。

「一つ手を間違えたり、簡単なほうに逃げたりしていると、結局、

あとになって、にっちもさっちもいなくなっちゃうんですね。
大局たいきよくかん観と戦略が必要だし、ある意味、経営の極意ごくいにも通じますよね」
小穂の話を、畔田はカプチーノのカップを片手に、ニヤニヤしながら聞いている。

「さすが、「フオーン」の創業者の娘だね。あの壁を五十センチ登っただけで、経営に通じる極意をつかむとは」

「何言ってるんですか」小穂は目を剥いた。「二メートルは登ってましたよ。畔田さんの声がめっちゃ下から聞こえましたし、落ちた時の衝撃しょうげきといったら、怪我けががなかったのが不思議なくらいです」

「いやいやいや」畔田は笑う。「俺の目線に背中があったから、二メートルは盛りすぎだな」

若きプロ経営者の畔田は、昨年いつぱいで「マイヤーズ・ニューヨーク」日本法人の社長を退任し、充電生活に入っている。

年明け、彼はアンダーソンスクールの先輩で「ガルウイング」グループを率いる岩清水いわしみずと、「クラブ紗也加さやか」に飲みに来た。畔田の慰い労ろうを兼ねたその席で、小穂は岩清水からお年玉として、「ガルウイングジム」の体験チケットをもらった。

そこから、「ガルウイングジム」では最近流行りのボルダリングの設備を入れた店舗がいくつかあり、畔田も嵌はまっているという話になって、小穂も成り行きから連れていってもらったことになったの

だった。畔田とは、暖かくなったら高尾山たかおさんに登りに行くという約束もしている。高尾山は険しいからボルダリングの技術も必要になるかもしれないと、小穂も悪ノリしてしまい、どう考えても苦手なスポーツではあったのだが、引くに引けなくなってしまった。

握力あくりよくを使い果たし、コーヒークップも両手かかで抱えるようにしなければ持てない状態ではあるが、何とか事故もなく体験をこなして、カフェでは心からの安堵あんどに浸ひたった。

落ち着きを取り戻したところで、小穂は話を変えた。

「そう言えば、畔田さんって、仕事用のバッグはどんなの使ってますか？」

「いくつかあるけど、「マイヤーズ」にいたときは、黒革くろかわの薄いブリーフケースが多かったかな。コンサル時代みたいに資料をいっぱい持ち運ぶような必要もなかったからね」

「国産ですか、それとも海外のブランド物か何かですか？」

「デパートで買ったから、それなりのところだとは思うけど、国産かどうかまでは憶おぼえてないな。ブランド物ではないよ」

あまり、かばんにこだわりはないような言い方だった。

「それが何か？」畔田が逆さかに訊く。

「紳士かばんを作ってる会社の社長を探す案件があるんですよ」小穂は答えた。「かばんは興味ないですか？」

「いや、もちろん、買うときは雑誌を見たり、売り場を方々覗いて
吟味したりはするから、人並み程度の興味はあると思うけど」畔田
は戸惑い気味に言う。「どんな会社なの？」

「いい会社なんですよ」小穂は勢いこんで答えた。「メイド・イン・
ジャパンにこだわって、職人を育てるのも使命だと考えてるよう
な会社です。現に社内にも工房があって、革の製品は主にそこで作
ってるそうです。企画は企画で優秀なデザイナーが何人もいて、職
場の雰囲気も自由な感じですし、新しさとい意味での古めかしさ
が混ざったような、何とも言えないいい会社なんです」

「へえ」小穂の力説に、畔田も少し興味が湧いたようだった。「安物
を大量生産してるような会社ではないってことか」

「違います。デパートやセレクトショップなんかにも卸してま
すし、「まるプラーザ」には直営店も出してるんです」

「ああ、あそこはいくつかかばんの店があったね」畔田はそう応じ
てから、また訊いてきた。「規模は？ 何人くらいの会社なの？」

「三十七人だそうです。年商は十八億くらいだって言っていましたね」
「ふうん」

「年俸として、二千四百万の提示です」

「まあ、それはそこそこだね」

「はい、社屋も年季が入ってますけど、自社ビルですし、無借金の

優良企業です」

「でも、そんな会社が、外から人材を探そうっていうのは何で？」

「いろいろと訳がありまして」さばさばとは説明できず、小穂は無意識に声を落とした。「社長は七十七なんですけど、がんを患^{わずら}って

まして、本人の理解するところによると、もう先は長くないから、早急に後継者を探さなくちゃいけないという……」

畔田は低くうなづいてから、また問いを重ねてきた。「七十七までやっつてることば、たぶんオーナー社長なんだよね？」

「そうです。創業社長です」

「それくらい規模の会社だったら、社長の子どもとか親族とかが跡を継ぐパターンが多いと思うけど」

「そこも複雑で」小穂は軽く頬^{ほお}をゆがめる。「奥さんはもう亡くなってるんですけど、そもそも、だいぶ前に別れちゃってるんですよ。

社長は今でもおしやれな感じなんですけど、昔はけっこうモテたらしくて、銀座のホステスなんかともいい仲になってたみたいなんです。それで奥さんが愛想を尽かして出てっちゃったんじゃないですかね。だから、今は一人身なんです」

「子どもは？」

「息子さんが一人いますけど、別れたときに奥さんのほうに付いていったし、いきさつがそんなふうだから、社長はすっかり嫌われち

やってるらしいんですね。完全に独立してるし、奥さんが亡くなったときも、向こうからは連絡も寄越さなかったそうですよ」

「なるほどね」畔田も事情を理解したようだった。「それで、社内にも適任者はいないと」

「そうなんです。家庭では夫失格だったのかもしれないですけど、かばん作りは真面目まじめに取り組んできた人なんだと思うし、いい会社なんで、何とか、いい後継者を探してあげたいと思ってるんですよ」

小穂はそう言い、無言でうなずいている畔田に、「どうですかね？」と問いかけた。

「うん……」

興味がありそうな、それほどでもないような、微妙な反応である。

「何か引っかけますか？」

「うん……引つかかると言えば、俺のような門外漢もんがいかんがそこに入って、いって、何ができるのかっていうあたりだよ。かばんって、実用品でありながら、趣味の要素もすごく強いし、それこそ、マニアが語り出したら、いくら時間があっても足りない世界でしょ。そういう世界をきちんと理解して、それなりの歴史がある会社を動かしていくってことを、今ぱつと話を聞いた段階では、自分の中でなかなかイメージできないところではあるから」

「もつともだと思えます」小穂は言った。「でも、社長自身が、後継者像を話してくださってるんですけど、別にかばん業界でキャリアを積んできた方でなくてもいいって考え方なんですよ。むしろ、そうじゃないほうがいいって。現場には優秀な人材がいるから、現場のことは現場に任せてくれる人のほうがいいんだって」

「ふうん……それだけ、自分たちが作っている物に自信があるってことなんだろうね」

「そうですね」小穂は相槌を打ち、訊いてみる。「逆に、惹かれる点とか、何かありますか？ 何もなかったらあれですけど」

「いや、それはもう、鹿子ちゃんかのこが、いい会社だって言ってる点だよ。手持ちの案件全部にそう言ってるわけじゃないだろうし」

「そうなんです。思っていないことは、私は言いません。今の時代、いくらでも安く仕上げて利益を出すやり方があるのに、愚直ぐちよくにこつこつ、いいモノを作っていこうとしている会社は貴重です。私は、そういう会社を応援したいんですよ」

カミ加減の小穂の言葉に、畔田は苦笑している。

「もし、ちょっとでも興味があるなら、とりあえずリストに入れさせていただきたいんですけど、どうですかね？」

覗きこむようにして意思を確かめると、畔田は少し考える間を置いてから、こくりとうなずいた。

「構わないよ。どちらにしろ、本格的な話にならないと検討しようもないし、今の段階でどうこう言っても始まらないからね」

「ありがとうございます。じゃあ、話が本格的に動き出したら、また相談させてもらいます」

小穂は笑顔とともに、そう言った。

「二見鞆」ふたみかぼん って、けっこう難しいですよええ」

「クラブ紗也加」でのバイトを終えた夜、送りの車の中で隣に座った美南が、そんなことをぼつりと洩もらした。

「何で？」

美南には、「二見鞆」のキャンディイトを探してくれと頼んである。瑞季みずきに代わって就いたリサーチャーとしての、実質、初仕事でもある。

「職人が何人もいるわけだし、規模的にもこぢんまりとしてて、昔ながらの製造業と言ってもいい会社じゃないですか。たぶん、義理人情が重んじられるような風土が残ってると思うんですよ。そういう会社に違和感なく収おさまって、社長をやれそうな人って、プロ経営者みたいな人たちとはまた違うタイプだと思うし、なかなかいい気がするんですよええ」

「そうかな」リサーチの仕事に慣れていないために、キャンディデ

イト探しのコツをつかみかねている様子の彼女に、ヒントを与える意味も含めて、小穂は応えた。「社長は経営能力を求めてるんだから、プロ経営者タイプは十分対象になると思うけど」

「でも、プロ経営者にアプローチしたところで、その本人が「二見鮑」に魅力を感じるかどうかの問題じゃないですか。プロ経営者が中小規模の、昔ながらの製造業を経営したがるかどうかっていうと、苦しい気がするんですよ」

「そんなことないよ」小穂は反論する。「二見」は昔風なだけの会社じゃないし、プロ経営者だって、何を会社選びのポイントにするかは人それぞれでしょ。現に、畔田さんなんかは興味持ってくれてるし」

現実には興味を持ってきているというほどの積極的な反応ではなかったが、話が進んで会社を見てもらえば、気に入ってくれる可能性は高いと思っている。

「え？ 畔田さんに声をかけたんですか？」

「そうだけど」美南があまりにも驚いた様子で言うので、小穂は戸惑った。

「畔田さんって、鹿子さんの切り札じゃないですか。そんな人をここで出しちゃうんですか？」

「駄目？」もったいないと言わんばかりの美南の口ぶりに、小穂は

言い返す。「いい会社だと思うから、紹介しようとしてるだけだけど」
「まあ、鹿子さんがそう思ってることなら、とやかく言うことじやないですけどね……」美南は、いかにも納得し切れていない口調で答えた。

どうも、彼女には、「二見鞆」のよさが理解されていないようだ。これまで秘書業務ばかりで、巷ちまたの会社や経営者を見る目を持っていないということもある気がする。

アシスタントに就いている瑞季には何も頼れない。美南もまだまだ力にはなってくれそうにない。今回は結局、自分の力だけで何とかするしかないなど、小穂は思う。

畔田というキャンディデイトが、小穂にとっての切り札であることは、まったくその通りである。

しかし、この状況を考えるとますます、畔田という切り札は、この案件でこそ切るべきではないかと思えてくる。

「先日の件ですけど、候補者を何人か挙げたリストを作りましたんで、週明け、打ち合わせに上がりたいと思うんですが」

「いい人はいそうかい？ 楽しみにしてるよ」

「二見鞆」を訪れてから三週間ほどが経った一月の終わり、小穂はとりあえずのリストを作って、二見にアポイントを取った。

本来ならもう少し時間をかけたところなのだが、二見の事情が事情でもあり、なるべく早く後継者を決めて安心してもらいたい思いがあった。

ただ、その分、キャンディデートは八人と少なめで、ロングリストと言うには、いささか貧弱ひんじやくである。しかも、畔田以外は、経歴的にも、物足りなさが否めいなない。知っているプロ経営者には全員、それとなく反応をうかがってみただが、工房を抱えた創業四十五年のかばんメーカーというと、町工場に毛が生えたような、旧態依然きゅうたいいぜんとした会社というイメージになってしまうのか、前向きな興味を示してくれる者はいないので。

それでも、このリストでいこうと思えるのは、畔田が筆頭に載っているからである。それだけでリストが締まって見える。二見に見せても、畔田一択になりそうな流れだが、望むところだという聞き直った気持ちもある。

ところが……。

「鹿子ちゃん、聞いたよ」

金曜の夜、客と同伴する予定の花緒里かおりに付き合って、銀座のサロンで一緒にヘアメイクをやってもらっていたところ、花緒里が話を振ってきたのだった。

「かばん屋さんの案件に畔田さん出そうとしてるんだって……?」

あつと思ひ、横目で反対隣ととなりに座っている美南をにらんだ。花緒里はこの案件に何の関係もないのだから、余計なことは言わなくていいのだ。しかし、美南はしらばっくれるようにしてスマホを見ているだけである。

「悪いことは言わないから、やめときな」

「どうしてですか？」小穂は口を尖とがらせて訊いた。

「畔田さん、人がいいから、鹿子ちゃんが、この会社を助けてあげてほしいなんて言ったら、引き受けちゃうでしょ」

「引き受けてほしいんです」

「鹿子ちゃんはそので満足かもしれないし、その会社もそれで助かるかもしれないけど、畔田さんが可哀想かわいそうでしょ」

「どうしてですか？ いい会社なんですよ」

「二見鞆」のことを知らないから言える意見だと反論したものの、花緒里の口調は変わらなかった。

「いい会社かどうか知らないけど、これと思うキャンディイトには、キャリア形成の責任も持ってあげないとね。いっぱい勉強してビジネススクール出て、エグゼクティブとしてのキャリアもこれからどんどん積んでいこうっていう人なんだからさ。十五年後、二十年後には、千人規模の会社を率いることができるようになって考えてあげるべきだし、それが実現できるような手助けを、今からしてあ

げるべきよ。百人近い組織のトップを経験したあとに、三十何人かの組織を用意して、それが彼のためになるかどうか考えてみな。しかも、それくらいの規模の会社だと、三、四年で誰かにバトンタッチってわけにもいかないでしょ。ヘッドハンターの自己満足で終わらせたら駄目よ」

初めてと言ってもいい、花緒里の辛口の忠告は、小穂の胸に容赦ようしやなく突き刺さった。

自己満足でやっているつもりはない。

しかし、この話が本当に畔田のためになるのかという点については、自信を持つて答えることができない。順調なキャリア形成からは束の間、離れるかもしれないが、こういう経験ものちのちにはプラスに働くはずだという論理で考えてはいなかったか。それは冷静に考えれば、小穂自身の都合が優先されたものではなかったか……。分からない。

「規模だけが会社の良し悪しの基準じゃないと思います」

強がるように、小穂はそう口にしていた。

むしろ、畔田のような、これからの人間には、それだけではない価値に目を向けてほしいという思いが、期待としてある。何も、彼のキャリアをないがしろにしようと考えているわけではない……。そう言いたかった。

「もちろん、そうだけど」花緒里は静かに言う。「でも、やっぱり、そうじゃない……鹿子ちゃんも分かっているとと思うけど」

そうだけど、そうじゃない……。

確かに、規模を追い求めることの大変さ、そこに責任を持つことの重みというのも、小穂自身、理解はしているつもりだ。事業というのは突き詰めれば、数字との戦いであり、そこから目を逸^そらして語ることはできない。

だから、それを脇^{わき}に置いて、ただ自分の期待だけを押しつけるのは、無責任だとも言えるわけで……。

理屈と感情があちこちでぶつかり合い、ますます何が正しいか分からなくなった。

「それは、でも……」「二見鞆」を成長させればいいわけじゃないですか。上場したっていいんだし、小さいからこそ、規模の可能性だって、これから十分あると思いますけど」

「うん……」花緒里は不意に、口もとに優しい笑みを覗かせた。「いろいろ考えて、それでもって思うんだったら、それはそれで間違っ
てはないのかもね」

追い詰められた気になっていたところに、すつと予先^{ほこさき}を収められてしまい、小穂は逆に戸惑う。

うまいな。絶妙だなと思う。

小穂が口で反論するほど単純には、この話を考えられなくなっていることを、花緒里はちゃんと感じ取っているのだ。

これ以上は言わなくても分かるだろうということだ。

いくつかの案件をこなして、一人前になったつもりだったが、まだまだだと思いき知らされるようだった。

「お、いい感じ」

今まで話していたことなど、あつという間に忘れたかのように、

花緒里はセットした髪を鏡で確認し、明るい声を出した。

そんな様子を横目で見ながら、小穂は小さく頬を膨らませ、さて、どうしようと考ええる。

週明け、小穂は面倒くさそうに付いてきた瑞季とともに、「二見鞆」を訪れ、二見にキャンディデートのリストを見せた。

「ふむ……」

眉間に皺を寄せ、食い入るようにリストを見ている二見を前に、

小穂は気まずい思いで座っていた。

二見はうなつたまま何も言わず、小さく二度、三度とうなずきながら、リストを机に置いた。そのうなずきが納得の意味でないことは、表情から分かった。

結局、畔田は、リストから外した。午前中いっぱい悩んだが、昼

休みに打ち直したものをここに持ってきた。

「もう少し若い人はいないかな」瞑想めいそうするように目を閉じていた二見が、おもむろに言った。「確かに、それぞれ経験はありそうだが、六十代半ばだと、この先何年やってもらえるかと思ってしまう。六十一の人も、持病があつて前の職場を離れたとなとね。申し訳ないが、躊躇ちゅうちよせざるをえないよな」

リストに残ったのは、いずれも中堅企業の会社の役員を務めたあと引退した者たちで、年齢的には六十代半ばから後半というところである。六十一歳の男は陶器メーカーの取締役とくしやくをしていて脳梗塞のうこうそくで倒れ、今は子会社の相談役に収まっている。後遺症こういしやうはほとんどなく、普通に働けるといふことだが、通勤に当たっては送迎車を用意するなどの条件がつく。そういう点で見ても、自分の会社を託たくすとすると、ためらいが生じるのも無理はない。

「なるほど、若い人ですね」

小穂は、言われて気づいたという調子で、そう口にした。

「そうそう」

「分かりました。ちょっと、経営の経験値にこだわりすぎたかもしれません。その方向でもう一度候補者を洗い直してみますんで、もう少しだけお時間をいただけますか」

畔田が載っていれば、何の問題もなく選ばれていただろうなと思

いながら、小穂はそう言った。

「うん、そうしてくれるかな」

「はい、がんばります」

勢いこんでアポを取っただけに、二見としても期待する気持ちがあっただろう。今日の時点ではそれに応えられず、小穂には苦い思いが残った。

「そのバッグはお気に入るか？ 使い勝手はどうだ？」

あとはもう、話題を変えるしかないとばかりに、二見は小穂のバッグに目を向けた。

「ええ、大きさがちょうどいいんで、五、六年は使ってるものです。

使い勝手は悪くないですけど、ビジネス向きに見えないのが、難点ですかね」

小穂が愛用しているナイロントートは「フォン」の商品で、本来は弁当箱などを入れてピクニックに行くときなどに使うものだ。紺の色味が落ち着いているので、仕事にもこれをこん使っているのだが、「フォン」で働いていたときはともかく、都心でいろんな会社を訪問するときにも持ち運ぶとなると、少々カジュアルすぎるかなと思わないでもない。

「よかったら、革で、それくらいの大きさのやつを、一つ作ってあげようか？」

「え？ そんな……いいんですか？」

思わぬ話に、小穂は綻ほころんでしまう口もとを手で押さえた。

「手も動かさないと張りがなくてね。まあ、空き時間にちよつとずつやるとなると、多少、時間はかかるかもしれないが、のんびり作ってみるよ」

「わあ、ありがとうございます」

「細川ほそかわさんはどうだ？」二見は、瑞季にも水を向けた。

「私は大丈夫です。今使っているので十分ですから」

瑞季のバッグは海外ブランド物で、使い古した感じもないから、いらな^{あいな}いと言え^{あいな}ばその通りなのだろうが、遠慮の仕方にまるで愛嬌あいせうがなく、二見は返事を聞いて苦笑いを浮かべるしかないようだった。

「そうか。なら、名刺入れか何か考えるよ」

「ありがとうございます。でも、無理はなさらないください」瑞季が顔色を変えずに言う。

そんな話も終わり、改めて、リストを作り直すことを約束して、ビルを出た。

ちやうど、前の通りを空車のタクシーが走っていたので、それを止めて乗った。

発進するとき、「二見鞆」のビルのエントランスから誰かが出てきたのが目に入った。

製作部長の瀬川^{せがわ}だ。小穂たちが乗ったタクシーが走り去ろうとするのを見て、足を止めてしまった。

追ってきたのだろうか……そんなふうにも見えたが、瀬川は打ち合わせに同席していたわけでもないのです、理由は思い当たらない。

「今日のリスト、ちょっとひどかったですね」

「え？」

隣の座席に座った瑞季から冷ややかに言われ、小穂は言葉に詰まった。

「ロングリストって言うには、人数足りなすぎだし、顔触れ見てもロートルばかりだし」

「一人、一推^おしの人がいたんだけど、外^{はず}さざるをえなくなつて……」
言い訳じみて聞こえるかもしれないが、小穂としてはそう言うしかない。

「リサーチは所^{ところ}さんですか？ まだ慣れてないにしても、もうちょっとがんばってもらわないと困るって、ちゃんと言ったほうがいいですよ」

まるで、自分なら、もっとましなキャンディイトを何人も挙げられたと言わんばかりだ。

だったら、動いてくれればよかつたのに……そう言いたくなるが、瑞季に手伝ってもらうことはとっくにあきらめているので、言葉に

は出さなかった。

「まあ、でも確かに難しい案件だからね」

代わりにそう口にする、瑞季には、「そうですかね」と冷笑混じりに切り返された。

まったく。

勉強してもらっているつもりが、駄目出しされてしまっている。

仕方ないから手を貸しましょうかと言われる前に、何とかがんばらなければ。

美南には、もう一度、四、五十代をターゲットにして、キャンディイトを探し直してほしいと頼んだ。もちろん、小穂のほうでも、社長経験者や重役経験者にこだわらず、能力と将来性という観点から、人材を絞り直すことにした。

「お久しぶりです」

「お久しぶり。元気そうね」

そんな日々の合間を縫って、吉野美代子とお茶を飲む機会があった。去年、彼女の面談の付き添いをした丸の内ホテルのラウンジで再び会うことになったのだ。

美代子は、キッズウェアの「キャンディーボックス」からカーテン・カーペットメーカーの「クララ」への引き抜き話がまとまり、

昨年なみきの十月に執行役員として移籍していた。

もともとは並木のキャンディデートなので、小穂から積極的に連絡するようなことはしていない。「クララ」に初出勤する日に花を送ったくらいだ。

ただ、美代子からすると、小穂を気に入ったのか、あるいは駆け出しのヘッドハンターとして危なっかしく放っておけないのか、折に触れ、電話やメールをくれるのだった。今回も、仕事の打ち合わせで丸の内に行くので、お茶でもどうかと、彼女のほうから声をかけてくれたのだった。

「「クララ」での仕事はどうですか？」

「うん、扱ってるものが全然違うから、勉強ばかりの毎日だけど、ようやく感じをつかんできたってとこかな」美代子は明るい口調でそう言った。

「会社の雰囲気はどうですか？」

「うん、おかげさまで、島貫しまぬきさんにも気を遣つかってもらってるし、社長にも気にかけてもらってるし、ずいぶん好きにやらせてもらってる。仕事ってこんなに楽しいんだって、最近、しみじみ思ったりすることもあるくらいだよ」

「わあ、それは何よりです」小穂は自分まで嬉しくなってきた。

「鹿子さんはどう？」美代子は逆に訊いてきた。

「私も仕事、楽しいです」小穂は笑って答える。「でも、当たり前ですけど、同じ案件って一つもないし、同じアプローチがどこにでも通用するわけじゃないから、いろいろ難しいです」

「経験が必要な部分はどうしてもあるわよね」

「そうですね」小穂はうなずいてから、切り出してみた。「吉野さんに訊くことじゃないと思うんですけど、誰か四、五十代で、三、四十人の会社の経営者に嵌まる^はような人って知りませんかね？」

「四、五十代で？」

「ええ。能力があれば、社長経験者じゃなくても構わないです」

「そうねえ」美代子は考えこむように言ってから、また訊いてきた。

「どんな会社？」

「かばんメーカーです。創業四十五年で、創業社長が重い病気なものですから、後継者を急いで探したいんです」

「難しいわね、それ」美代子は困ったような笑みを口もとに小さく覗かせた。「それくらいの会社で、創業者がずっと引つ張ってきたんなら、かなりドメスティックな空気なんだろうし、外から連れてきて、うまくいくかどうか分かんないわよね」

「そうなんですけど、中には経営の舵取り^{かじ}を任せられる人材がいないらしくて、外から探したいってことなんです」

「でも、いくらその社長が納得して後任を決めたとしても、まった

くの無関係な人なんて、嵌まらないんじゃないかな。例えば、私が「キャンディーボックス」にいる誰か優秀な人を紹介して、その人がその会社の社長を引き継いだとしても、従業員は戸惑うだけだと思うな」

「そりゃまあ、最初は戸惑うでしょうけど……」小穂は口ごもりながら応える。

「親会社があつて、そこから人を呼ぶとかなら、まだ割り切れるんだろうけどね。経営陣の外部招聘しょうへいが珍しくない時代だつて言つても、そういうタイプの会社は、なるべく内部から探したほうがいいと思うわよ」美代子はそう言つてから、付け足した。「あるいは、取引のある会社から人材をもらうとか、昔働いてた人を呼び戻すとか」

「ああ……職人さんで独立した人は何人もいるつて言つてましたけど」

「うん……とにかく、何らかの接点を持った人のほうがいいと思う」
「そうですね……ありがとうございます」

取っかかりのヒントをもらえた気がして、小穂は礼を言った。

美代子と別れて丸の内ホテルを出た小穂は、その足で「まるプラザー」に寄つてみることにした。

「まるプラザー」はファッションを中心とした各種専門店がテナン

トに入っている商業施設である。紳士用品が並ぶ四階には、「二見鞆」のブランドショップ「f t m」がある。

この直営店には、二見からサーチの依頼を受けたあと、一度覗きに来ているのだが、そのときは小穂も、キャンディデイトの選定を手探りで考えているところだったので、訪問に確固たる狙いがあったわけではなく、こういう店を構えているのだなと確かめただけに終わった。二見が口に使っていた店長の姿もなかった。

ただ今回は、美代子からもらったヒントを足がかりに、店長がいれば訊いてみたいと思うことがあった。

「f t m」は二坪ほどのこぢんまりとした店舗である。壁には「f t m」というおしやれなロゴの下に、一回り小さく、「二見鞆」という文字が老舗感漂う書体で記されている。

並べている商品は、高級ラインである革製品ばかりだ。主力商品である化繊素材かせんのものはデパートやセレクトショップに任せ、この店舗ではブランドのイメージ構築を第一義としているようだった。

店には、前回訪れたときに、売れ筋商品などを説明してくれた女性スタッフのほか、中年の男性スタッフもいた。彼が店長なのではない、小穂の対応に進み出てきた女性スタッフに訊くと、やはりその男が店長の野々宮ののみやだと分かった。

「こんにちは」

挨拶して自己紹介すると、野々宮は二見から話を通して、
を裏づけるように、「ああ」と心得たような反応を見せた。

「上に行きましょう」

ここでは落ち着いて話もできないと思ったのか、彼は女性スタッフに店を任せ、小穂を上階にあるカフェに誘った。

「私は二見から直接聞いてたんであれなんです、今、会社の中も、次の社長を外から呼ぶって噂で持ち切りですよ」野々宮はホットコーヒーをテーブルに置いて小穂と向かい合うと、苦笑気味にそう切り出してきた。「そうですか。あなたが……」

「そうなんです」小穂は応えた。「二見社長も、ここまで育てた会社を何とかこの先も、いい形で続くようにしたいということで、その道を決断されたのだと思います」

「いや、二見の心中しんちゅうも分かりますよ」野々宮は言った。「たぶん、上のほうにも、自分に任せてくれと名乗り出る人間はいなかったんですよ。うちは企画も製作もある意味、専門家集団ですから、そういうところがあるんですね。ずっと二見が社長であることが、四十五年間、当たり前前の景色だったんです。会社のこととは社長に任せて、自分たちはかばん作りに集中してればよかった。給料も同業の中ではたぶん手厚いほうですから、それで長く働ければ文句はないって人間がほとんどだと思います」

「営業の上の方はどんな感じですか？」

「創業の頃からいる人たちは十年くらい前をピークに定年を迎えましてね、職人さんは独立して、仕事を続けてる人も多いですけど、営業畑の人間はまあ普通にリタイアですよ。残ってるのは専務くらいで。その下の層が薄くて、営業部長も何となく繰り上がっちゃったって感じなんです」

野々宮は高卒で「二見靴」に入り、三十年目。営業畑では、営業部長の下になるのだという。自分がその位置にいるくらい、人材は乏しいのだと言いたげな口調だった。

「なるほど」小穂は野々宮の話にひとしきり相槌を打ってから切り出した。「実はですね、もちろん、外部で適任者はいないか探してはいるんですが、その一方で、これまで会社と関わりがあった方の中に優秀な方がいらっしやらないかなとも思ってるんです。正直、「二見靴」さんのような会社ですと、中の空気を知ってらっしやる方の方が、いろんな意味で無理なく引き継げるといふ気がするものですから」

「それは正しい考えだと思います」野々宮が我が意を得たとばかりに言った。「全然知らない人が社長になるっていうのは、やっぱり不安ですしね。そういう意味で言うと、適任が一人います。これは私だけの意見じゃなくて、企画や製作の上の人間も言ってることです

けどね」

「誰ですか？」そんな人材がいるのかと、小穂は浮足立った。

「晴久はるひさくんです。社長の息子です」

「ああ……」

「晴久くんは私と同じ年でしてね、私は入社当時は職人志望で、工房に入れてもらってたんですが、晴久くんは日藝にちげい（日本大学藝術学部）に通ってまして、アルバイトで工房に来てたんです。それが、私より全然筋すじがよくてね、まあ、職人失格で早々と営業に回された私なんかと比べても仕方ないんですが、今、製作部長をやってる瀬川なんかも目をかけてましたし、実際、器用で、センスは抜群くつぐんでしたよ」

つい先日、二見との打ち合わせを終えて「二見鞆」を出てきた小穂たちを、瀬川が追ってきたような一幕があつたのを思い出した。

瀬川が言いたかったのも、このことだったのかもしれない。

「ただ、家庭問題でいろいろあつて、事務をやつた奥さんと一緒に姿を見せなくなっちゃって……でも、もう昔のことですし、奥さんも亡くなっちゃったみたいですし、何とかならないかなって思うんですよ」

小穂は無意識のうちに、喉のどの奥で小さくうなづいていた。

この案件、キャンディデート探しに苦労しているが、晴久を口説くど

き落とせば、難なくまとまる問題なのだ。

「うちみたいにブランドを持つてる会社ってのは、創業家の血が大
事なんですよ。[f t m]のブランドコンセプトとクオリティーが保
たれているってことを示すのにおいて、それがあるってことが、一
番分かりやすいですからね。僕は彼を呼び戻すのが一番だと思いま
す」

小穂は彼の話に深くうなずいた。

次の日、小穂は瑞季を引き連れて、もう一度、二見のもとを訪ね
た。

前回の打ち合わせから日も経っておらず、新たなリストを作って
きたという期待は二見も持っていなかったようだったが、リストの
作成を飛ばして、キャンディデートを晴久一人に絞りたいという小
穂の提案も、予想はしていなかったようだった。

小穂の言葉を聞いて、二見は束の間、面食らったような顔をして
いたが、やがて押し黙ったまま、考えこむ様子を見せた。

「確かに……」ようやく口を開いたとき、彼は、本音で語ろうと決
意したような、どこか潔い顔つきになっていた。「うちの連中からも、
晴久でどうかってという声はあったんだ。私もそうなるなら、それに
越したことはないと思うよ」

「やっぱり、そうですね」

「ただ、それを口にする、自分自身、虫がよすぎるっていうか、ずいぶん身勝手な物言いなんじゃないかって思えてね……なかなか、言いにくいところではあったんだ」

「でも、会社のことを考えても、それが一番の道だと思います」

小穂がそう言うと、二見は素直にうなずいた。

「ただ、一番難しいかもしれないよ。あいつが簡単に引き受けてくれるとは思えない」

「それを口説き落とすのが、ヘッドハンターの仕事です」

小穂の意気込みを交えた言葉に、二見は小さな笑みを洩らした。

「親子の話だけど、私は下手に動かないほうがいいだろう」二見は言った。

「そうですね。まずは私たちにお任せください」小穂はそう応えた。

「鹿子さん……」

ビルを出たところで、この日は、製作部長の瀬川に呼び止められた。

「後継者の件で、お願いしたいことがあります」

「晴久さん、ですよね？」

小穂が先回りして言うと、思い切って声をかけてきた様子の瀬川

は、拍子^{ひょうし}抜けしたように口を開けて、小さくうなずいた。
「お任せください。何とか、晴久さんに決まるように動いてみます
ので」

小穂の気持ちはストレートに伝わったらしく、瀬川は神妙^{しんみょう}な顔つきで「お願いします」と頭を下げた。

「立場的に、本当は私や原田が引つ張らなきゃいけないのかもしれませんが、力もないのに無責任に引き受けることはできません。会社がどうなってもいいと思ってるわけじゃなく、むしろ逆なんです。晴久さんなら、私も彼の若い頃を知ってるし、支えてやれます。何とかお願いします」

「分かりました」小穂はそう請け合ってから、声を落として彼に訊いてみた。「ちなみにですけど、社長のご家庭が壊れた原因っていうのは、まあ、プライベートなことが引き金なのかなとは感じてるんですが、具体的に瀬川さんはご存じですか？」

瀬川は初め、言いにくそうにしていたが、小穂が辛抱強^{しんぼう}く待っている、やがて口を開いた。

「そうですね……簡単に言うと、彼の女性問題です」

「銀座のクラブの……？」

「いえ、それはまたあとから分かったことで」

明美^{あけみ}が直接の原因ではないと知って、小穂はなぜかほっとした。

「問題になったのは、うちの従業員です。奥さんの下で働いてた子
だったんで……」

「うわわ……」

それは揉めるはずだ。

「それも、子どもができたってことから、二見が慌あわて出して、発覚
しましてね」

「ええっ？」

「それが結局、二見の子どもじゃないって分かって、その子もなか
なかのタマだったって話なんですけど」

「はああ……」

「ただまあ、そうなると、覆水盆かきすいぼんに返らずで」

「なるほど」

それは、家族に捨てられるのも、無理はないなと思う。

「二見にしても、甘いというか、調子に乗ってた部分はあったと思
います。それを弁護しようとは思いません。ただ、ああやって病氣
になって、この先どうなるか分からないってことになる、このま
ま、親子離れ離れにさせたままでもいいのかとも思うんです」

「そうですね。これを機に、過去は水に流せばいいですよね」

瀬川と別れ、タクシーに乗る。三十年前のことというが、親子の
わだかまりはどれくらいものだろう……小穂がそんなことを考え

ていると、隣に座った瑞季が、面白くなさそうな吐息をついた。

「そんなの、社長の自業自得じゃないですか。それを病気で弱っているからって言って、わざわざ周りが気を回して、元のさやに収めようとか、息子さんにしたら、余計なお世話だと思えますけどね」

刺々しい言い方に、小穂は苦笑いを引きつらせる。

「まあ、でも、昔の話だし、今はもう、会社の問題が関わってきているから」

「何でそんな、血縁にこだわるんですかね」瑞季はなおも言う。「社長個人がこだわるならまだしも、部下が忖度するように言うなんて」

「息子さん自身、昔、ここでバイトしてたらしいから、その器だつてことも分かっているんじゃないのかな」

「別に無関係な人でも、有能なら、それでいいと思いますけどね。」

そういう血縁とかにこだわってる風土だから、会社も大きくならないんですよ。これからの時代、これくらいの会社だって、どんどんプロ経営者を受け入れていくべきですよ」

そうなるはずだからこそ、自分はこの仕事を選んだとでも言いたげな彼女の口調だった。

果たしてそんな時代が来るのだろうか……小穂にはよく分からない。

今現在で言うなら、小穂の父が社長を務める「フォン」が、そ

のボーダーにいるのかもしれない。「二見鞆」より組織の規模が大きい「フォン」でも、おそらく父は、小穂を第一の後継者として考えていた。しかし、これからの時代に「フォン」を送り出すための合理的な判断において、小穂はその構想から外れた。

同じ創業社長である二見と小穂の父とで、考え方はどう違うのかは分からないが、何となく重ね合わせたくなる。

自分自身のことと思うようにならないが、その分、二見親子については、何とかしてやりたいと思う。

目黒に、「インテリアastreet」とか「家具屋通り」と呼ばれる界隈かいわいがある。

母方の姓になっている高田たかだ晴久が経営するインテリアショップ「スクイラル」は、その一角にあった。

どういうアプローチがいいだろうかと考えながら、頭の中がまとまらなかった小穂は、とりあえず下見に終わってもいいと割り切り、目黒に足を運んだ。

店に向かう途中に、おしやれなインテリアショップが何軒も目に留まり、瑞季を連れてこなかったのをいいことに、少しばかり寄り道した。その間も、アプローチの仕方や口説き方などをあれこれ考えたが、やはりこれだというものには行き着かなかった。

できれば、それほど大した店ではなく、自転車操業で四苦八苦しゅくはつくの経営をしていてくれないかなと思った。そのほうが口説きやすそうだ。しかし、そんな店舗経営しかできない人間を、三十人からの会社の、次の社長に据えようとするのも問題ではある……。

取りとめもないことを考えているうちに、「スクイラル」を見つけた。意に反して、ちゃんとした店だった。このあたりの店としては平均的な大きさが、二階にも売り場があるようだ。

ミッドセンチュリーが専門なのか、モダンでありながらどこか懐かしく、ユニークでポップなデザインの家具が整然と並んでいる。小穂はしばらく仕事を忘れて、それらキッチンテーブルやキャビネットに見入り、値札もチェックしながら、自分の部屋に合うのではないかと、本気で検討したりした。

一階のフロアには、女性店員が一人いるだけだった。「いらっしやいませ」以外の声はかけてこない。小穂のほかにも客はいたが、各々おの、気ままに見て回っている様子だ。ジャズが控えめなボリュームで流れている。

二階には、ソファやリビングテーブルなどが置かれていた。ここにも女性店員がいたが、もう一人、四十代後半のセーター姿の男性が、奥のカウンターテーブルで書類を広げている姿があった。

一目見て、彼が晴久だと分かった。白髪しらがが多少交じってはいるが、

ウェーブのかかった長めの髪は丁寧ていねいに整えられていて、あごひげもおしゃれかに刈られている。目尻かのあたりは優しげで、二見社長おもの面影かげがあった。

「こんにちは」

どう話を持っていくかというプランはまったく練れていないままだったが、小穂は思い切って、彼に声をかけてみた。初めて会った気がしないという、勝手な親しみを感じてしまっていたせいもあったかもしれない。

「晴久さん、ですか？」

小穂の問いかけに、晴久はうなずきながらも、戸惑まゆい気味に眉を動かした。

「私、鹿子と申します」

小穂は自分の名刺を出した。

「エグゼクティブサーチの仕事をしておりまして、分かりやすく言うと、ヘッドハンターです」

「ヘッドハンター……」晴久はなおも戸惑っている。「私に何か？」

「はい。実は「二見鞆」の件で、聞いていただきたいお話があります」

小穂が切り出した言葉に対し、晴久は眉をひそめて拒否反応をあらわにした。

「何ですかね……私には関係ないことですし、面倒くさい話は勘弁かんべんしてほしいんですが」

小穂は構わず、問いかける。「お父様——二見社長のご病状についてはご存じでいらつしやいますか？」

「知ってますよ。入院したとか退院したとか、いちいち向こうから連絡してくるんですから」

「病状は深刻でして、社長は後継者探しを我々に依頼してきています」

晴久は一瞬言葉に詰まったように小穂を見たまま沈黙したが、すぐに感情を消したような表情になった。

「それで、私に何の用事があるんですか？」

「一度、お店が終わったあとにでも、ゆっくりお話ができる時間をいただけるとありがたいんですが」

「そんな面倒くさい話なら、聞きたくないですね」晴久は言った。「父の会社のことは、もう何の関係もありませんし、誰が後継者になるうが、勝手にやってもらえばいいことだと思います」

「私たちは、晴久さんを後継者の最有力候補として考えています」

「え……?」

晴久は一瞬、表情を強張こわばらせてから、悪い冗談でも聞いたように、冷笑を浮かべてみせた。

「勘弁してくださいよ。私には、そんな気はさらさらありません。父が何を言ってるのか知りませんが、もともと身勝手な人間ですから、真に受けなくてください」

「これは二見社長が提案されたものではありません。『二見鞆』さんの経営環境や社内事情を勘案して、私どもが導き出した考えです。社長以外の幹部の方々からの意見なども聞いてのことでもあります。それを、社長の了解を取って、こうやって実際に交渉に動くことになったということです」

「誰の考えでも同じです。私にはこの店がありますし、父の息子だということだけで、勝手に跡継ぎを期待されても困ります」

予想通りと言うべきか、予想以上と言うべきか、取りつく島の無い返事に、小穂は早くも攻め手をなくしてしまった。もともと、半分は様子見のつもりで来ただけに、作戦もなくぶつかっていつてしまったことを後悔した。

「いきなりこんな話を聞かされて、困惑されるのも、もつともだと思いません。ですが、『二見鞆』という名門かばんメーカーの行く末が懸かっていることでもありますし、何とかいい解決策が見つければと思っていますので、また日を改めて、ご相談できればと思います」

小穂はそう言って、とりあえずは引き退がることにした。

「何度来てもらっても、同じ返事しかできませんよ」

晴久からはそんな言葉を受け取り、小穂は彼の店をあとにした。

「まず、赤のガバをがんばってクロスで取ろう。そしたら、次は楽になるから」

「クロスで赤ですね」

小穂は右手を左上に伸ばして、出っ張りを探す。身体がねじれ、脇がつりそうだ。

しかし、ここを回避してしまうと、その先で立ち往生おうじようしてしまうのは、先日分かったことである。

右手を一生懸命伸ばしていると、ようやく目当ての出っ張りに当たった。

「それぞれ。つかんで」

畔田の声に押されるようにして、小穂はそれに指をかけた。大きな出っ張りだったので、つかみやすく、安定感がある。

「よし、じゃあ、右足を左足の上にある緑のホールドに持っていこうか」

右足を左足の近くにある出っ張りに移すと、不安定だった左手も自由になり、上の出っ張りに持つていくことができた。

天井てんじやうまで……は無理だから、あの白い出っ張りまで行こう。

小穂は腕に力をこめて体重を支え、左足を引き上げた。

「今日はだいぶがんばったね」

ボルダリング二回目の挑戦となった今日の小穂については、さすがに畔田も褒めるしかないようだった。

「いやあ、すごい達成感です」小穂は前回も立ち寄ったカフェで、心地よい疲労感を意識しながら、上機嫌に言った。「やっぱり、どんな難しい壁でも、逃げずに立ち向かわないといけないんですね」「また悟ったね」畔田がからかうように言う。「でも、あそこまで行ったら、もう少しがんばって、上まで行けばよかったのに」

小穂が到達したのは、四メートルの天井まで一メートルほど下にある出っ張りまでだった。

「私のゴールはあそこです」小穂にはやり切った思いしかないのです。そう言うほかない。「下手にあれ以上、上に行くと、落ちて怪我しても困りますし。三メートルだなんて、象の背中に登ったも同じですよ。十分すぎるほどです」

「鹿子ちゃんは、そこそこがんばり屋には違いないけど、自分に課すハードルも低いから、すぐに満足感が味わえてお得だよね」畔田が変な褒め方をする。

「基本的に負けず嫌いなんですけど、あきらめるのも早いから、そうしてるんです」

小穂が言うと、畔田は「なるほど」と笑った。

「そうだ。この間の、紳士かばんの会社の話」小穂は話題を変え、そのことを切り出した。「こちらから振った話で申し訳ないんですけど、いろいろ考えた結果、社長の息子さんを第一候補として動くべきだと思ひまして、今回は、畔田さんはリストから外させてもらいました」

「そうなんだ」畔田は淡々と応じた。

「いい会社だとは思うんですけど、外からやってきて、独自の成長戦略を立てて、自由に采配を振るおうとするなら、規模にしても経営環境にしても、もっと違うタイプの会社の話を焦らずに待ったほうがいいのかなという気がしまして」

「うん、俺も別に焦ってはいないし、それは任せるよ」畔田は言った。「まあ、息子さんが引き受けてくれる可能性があるなら、それが一番いいだろうね」

「でも、難しいことは難しいんですよ」小穂は口をすぼめた。「出たとこ勝負で一回当たってみたんですけど、けんもほろろで」

「そこはやっぱり、ちゃんと作戦を練っておかないと。手順を間違えると、途中で行き詰まっちゃうって、ボルダリングで体得したんだから」

「そうですね」小穂は苦笑して応えた。

いったんリセットする時間が必要だと思い、二週間近くは作戦を練るのに費やした。

結果として、考えに至ったのは、このまま小穂一人で晴久を説得しようとしても無理があるということだった。通常のヘッドハンティングでも、迷いのあるキャンディデートを口説き落とすのに物を言うのは、当事者であるクライアント側の熱意である。

ただ、今回に関しては、二見社長自らが交渉に乗り出したところでマイナスにしかならないのは目に見えている。

そこで小穂は、アイルバイト時代の晴久を知り、彼が後継者になることを望んでいる瀬川たちの力を借りることにしたいと思った。

二見に連絡を取り、瀬川たちとの打ち合わせを要望した。

「二見鞆」で打ち合わせがあるときは瑞季も同行させると決めているので、彼女にも声をかけた。彼女は露骨に面倒くさそうな顔をしながら、渋々という感じで付いてきた。

「そんな調子なら、誰が説得したって無理なんじゃないですか」

行きの道中、晴久に打診したときの手応えと今後の方針をかいっまんで話すと、瑞季からは、そんな冷ややかな反応が返ってきた。

「そこを何とかするのが、うちの仕事だから」小穂は自分にも言い聞かせるように言った。「無理だと思えても、考えれば何か答えが

見つかるはずだって、並木さんもよく言ってるでしょ。大丈夫。何とかなるはず」

難しい案件ではあるが、見事この事態を打開することで、先輩へツドハンターとしての面目を保ちたいところである。

「二見鞆」では、製作部長の瀬川と企画部長の原田、直営店店長の野々宮に加え、専務の定村さだむらにも集まってもらった。

「みなさんも、晴久さんを後任社長として迎え入れることに異論はないと聞いています。会社の上層部がその考えで一致しているというところが、こちらの最大の武器です。ぜひ、私と一緒に晴久さんの店を訪ねて、直じかに考えを伝え、彼の気持ちを動かしていただきたいと思います」

畳みかけるように押しかけていっても、晴久がこちらの思いを消化し切れないまま終わってしまうおそれが出てくる。こちらの思いが浸透し、向こうに考えさせる時間が必要だ。週に一人ずつ会いに行き、約一カ月間かけてこの交渉を推し進めることにした。

打ち合わせが終わったところで、小穂は社長室に二見を訪ねた。

「一カ月か……見極めどころとしては、そのへんが頃合だろうな」

二見は壁にかかったカレンダーを見やりながら言った。自身の病状と相談しながら口にした言葉のようでもあった。

「がんばりますんで、もう少しお待ちください」

小穂は言い、何気なく壁際の作業テーブルに目を移したところで、無意識に目を見開いていた。

そこには、あめ 飴色のトートバッグが置かれていた。

「ああ、それは私が作ったやつじゃないよ。あんたにあげるやつは、ゆっくり作ってるから、もう少し時間をくれよ」

「あ……いえいえ、全然大丈夫です。楽しみに待ってますから、ゆっくりやってください」

小穂は慌てて作り笑顔を取り繕った。二見に作ってやると言われていたバッグが出来上がったのかと一瞬思ってしまった、それを彼に見透みすかされてしまったのが恥ずかしかった。

「見りゃあ、だいぶ古いやつだつて分かるだろ。これは昔、晴久が作ったものだ」

「へえ……」

確かに、革はヌメ革が長い歳月を経て、そうした色に変化したものようだ。

「野々宮さんが、自分とは違ってセンスがあったって言ってましたけど、本当に上手ですね」

「これは、あいつが初めて作ったかばんでね、まあ、売り物になるレベルじゃないが、十八、十九の坊主が作ったにしてはなかなかだ。

先は長いと思って褒めなかったが、褒めてやってもよかったな。も

「いつも、あいつもこれで満足はしてない顔をしてた」

昔は、口に出さなくても親子の気持ちが通じ合っていた日々があったのだ。

また、そうした関係に戻れる日が来ればいいなと思う。

二日後、小穂は直営店店長の野々宮を連れて、目黒の「スクイラル」へ行った。

アポイントも何も取っていなかったので、いったん、小穂だけが店に入って、二階に晴久の姿があるのを確認した。彼に小さな会釈えしやくだけを送って、外に引き返し、野々宮と一緒に再び二階へと上がった。

「ハルくん、久しぶり」

小穂の顔だけを見たときには、先日と同じように迷惑そうな表情を見せた晴久だったが、野々宮に声をかけられると、さすがに驚いたようだった。

「野々宮だよ。憶えてる？」

「いや……もちろん」

「ハルくん、変わってないな。俺なんか、すっかりおっさんだ。見なよ、このぜい肉」

「いやいや、俺だって昔とは違うよ」

まずは同い年の野々宮を連れてくることによって、こちらとの距離を縮める……そんな小穂の狙い通り、野々宮は人懐ひとなつっこい笑みで晴久と旧交を温め始めた。

「せっかく来たんだから、ちょっとくらいいいだろ。十分か二十分だ」

野々宮がそう言って、店の二軒ほど隣にあるカフェに場所を移すことにも、晴久は逆らわなかった。

カフェで丸いテーブルを囲んで、しばらくは昔話が続いた。

「ミシンも、俺なんか、朝から晩までやったって、まっすぐに縫うことさえできないのに、ハルくんなんか、夕方ちよつと来て、カーブ縫いもさらつとやっちゃうんだから、本当、立場なかったよ」

野々宮の自虐じぎやくを混ぜた思い出話に、晴久の表情も和やわらいでいる。小穂が一人で訪れた先日とは違い、彼の心の壁は明らかに取り払われていた。

しかし、そう見えたのも束の間、野々宮が二見社長のことに話を移すと、晴久の顔色は見る見る冷めたものになった。

「人の家庭の問題にまで立ち入るつもりはないんだけど、これは会社の将来の問題でもあるんだから、俺には関係ないなんて言ったられないんだよ」

「どうか、うちの会社を助けると思って、よく考えてもらえないか

な」

「直営店をやっていると、まだまだうちの会社の可能性を感じるよ。最近では外国人の客も増えてきてる。メイド・イン・ジャパンはハイクオリティーの証あかしだと、世界でも認知されつつあるんだよ。うちの品は、使い勝手が考え抜かれてるからね。国籍関係なく、そういうのが分かる人には分かるんだ」

「もう三十年経ってるんだしさ、そろそろ許してやってもいいんじゃないかな。今、お互いが歩み寄らないと、もうずっとそのままのことになっちゃうよ」

野々宮の話の一つ一つを、晴久は黙って聞いていた。心の扉を閉めているわけではなく、それなりに言葉を咀嚼そしやくしている様子ではあった。ただ、それで心を動かされているかという点、そういうわけでもなく、視線はあまり野々宮のほうに向いていなかった。

「話に分かるけど、期待には応えられない」晴久は、熱弁を振るった野々宮を少し気遣うように、申し訳なさそうに言った。「俺にはもう、自分の仕事があるし、自分の生活があるからね。社長の息子としてのだけなこと、そういう話を持ってこられても、本当に困るんだ」

「いや、返事は今じゃなくていいんだ。ゆっくり考えてくれれば」小穂から野々宮に頼んでいたのは、返事を性急に求めないことであつた。一カ月かけて、徐々に気持ちを变えさせるのが、この作戦

の狙いだからだ。

「いや、考えても同じだよ」晴久は言う。

「今の仕事や生活の問題が大きいですかね？」小穂は訊いてみた。「社長との関係については、率直に言って、どうですか？」

「関係ないとは言いません」晴久は言う。「もちろん、私が父の一人息子である事実は変えようがありませんから、父が死んだときには喪主もしゆくらいは務めなきゃいけないのかもしれない。でも、それと仕事を継げというのは、別問題ですよ。それは、父の人生を肯定こうていしろというのと同じです。「二見艶」は父の人生そのものだからです。私は母に同情したし、だからこそ、母に付いていった。私の人生には、母の無念が混ざると言ってもいいでしょう。父の仕事を継ぐというのは、それを否定するのと同じです。もう三十年経ってるんだから、許してやれってことじゃない。私は私の人生を築いてきたんだし、三十年経ってるからこそ、引き受けられないんです」

感情論ではなく、沽券こけんの問題だと言っているようだった。こういう論理を説き伏せるのは、なかなか難しいなと思った。野々宮も「まあ、気持ちには分かるけど」と、たじろぎ気味だ。

とりあえずは、今の仕事と兼務するという提案はどうだろうかとも思ったが、思いつきのように言っても、軽く考えているように取られるだけだという気もして、それを口にする機会はまだ別に見極

めることにした。

「結論は急いでいけませんので、またいろいろご相談させていただければと思います」

小穂は最後にそう言って、まだあきらめる気がないことを伝えておいた。

「何回来られても同じですよ」

晴久からはそう返された。

次の週には瀬川を連れていった。

晴久が「二見鞆」でバイトをしていた頃、瀬川は二十代の半ば。若手の有望株として頭角を現し、晴久や野々宮の指導役でもあったらしい。

そんな瀬川の訪問は、野々宮とはまた違うインパクトがあったのは確かだった。戸惑いながらも、小穂が先日のカフェでまた話をしようと誘うと、素直に付いてきた。

「お久しぶりです。お元気そうで何よりです」

かつてのアルバイト学生に、瀬川は敬語で話しかけた。

「やめてください。そんな、改まって」

晴久はそう困惑している。

「いや、昔のことは昔です。今日の私は、晴久さんを「二見」の次

期社長と見込んで、会いに来てますから、一線を引かせてもらいます」

「申し訳ないですけど、それについては、何度もお断りしています。瀬川さんに来ていただいても、答えは変わりませんよ」

「晴久さんの気持ちのしこりについては、私はそれなりに分かっているつもりです」瀬川は言った。「私も社長と長く付き合ってきて、いい面もそうじゃない面も見てきてます。尊敬できる人間、頼りになる人間ではあるけれど、普通の人間だなと思うこともある。ある意味、実の親を見ているのと同じ感覚です。」

三十年前のときは、私も、社長はまったく何やってんだと思いました。奥さんは一生懸命会社を支えてきたのに、可哀想だと思いました。周りもみんな、そう思っていましたよ。奥さんがあのままだら、もつとうちは大きくなつたと思います。」

もちろん、我々は実の親子じゃないし、しよせんは雇われの身ですから、そのあとでも割り切つて、社長に付いていきました。でも、そうした思いは今の上の連中、みんな共有してます。それが、社長のあとは晴久さんという期待につながってるんです」

瀬川とは事前に、どういう言葉をかけるべきかという打ち合わせをしているが、三十年前、職人連中はみんな、奥さんに同情的だったという話を聞き、そのことを軸として話を組み立ててくれるよう

頼んであった。晴久は、「二見鞆」は父の人生そのものであり、跡を継ぐことは、父の人生を肯定することだと言う。しかし、会社の中にいる者たちは母親の立場も肯定している、との論理でそれを打ち消し、晴久を社長に呼び入れる大義をその方向から形成する戦法だ。

瀬川はその理屈を彼なりに消化し、自分の言葉で晴久に語ってくれている。立て板に水というような調子ではないが、逆にその口調のぎこちなさが、話に人間味を宿す効果を生んでいた。

「そうおっしゃられても困ります。「二見鞆」は、父が四十五年にわたって育ててきた会社であることには違いありませんし、私はもう三十年もそこから離れています。そもそも、たかだか一年足らず、バイトで職人さんの真似事まねごとをさせてもらっただけですよ。そんな人間に社長を託すなんて、馬鹿げた考えです」

晴久の表情は強張っていた。小穂には、自分のこれまでの立場を無理に固持しようとするために、そうなっているように見えた。それだけ、瀬川の言葉が響いているように思えた。

「正直、社長自身は、晴久さんを後継者とすることをあきらめていたと思います。社長をうなずかせて、鹿子さんたちに動いてもらうようにまですしたのは、我々下の人間が声を上げたからだと思ってます。晴久さんがやらなければ、それこそ、うちとは何の縁もない人が経営者と呼ばれることになるでしょう。それを思えば、晴

久さんこそ相応ふさわしいと考える我々の立場も分かってもらえるんじゃないかと……」

「社員の立場としては、そうなるのかもしれませんが」晴久は目を伏せるようにして言った。「私は私で、今の仕事があります。何年もかかって築き上げてきたもので、それで家族を養っています。仕事相手との付き合いもあります。簡単に投げ出せるものではありません」

「その件で一つ、提案させていただきたいんですが」小穂は口を挿はさんだ。「とりあえずは、こちらの店もそのまま持つていてもいいのではないかと思います。もちろん、兼務は厳しいでしょうが、誰かこちらにマネージャーを置くことで日々の業務は対処できると思いますし、将来的に、「スクイラル」さんで「f t m」を扱ったり、何かインテリア雑貨とバッグが融合するようなビジネスが生まれたり、そういう新たな可能性も出てくるんじゃないでしょうか」

「そう言われても……」

小穂の提案に対しては、困惑を隠し切れないような様子だったが、それは不可能だという反応ではなかった。少なくとも、今の仕事が社長を引き受けるにあたっての障害にはならないということを示せたのではないかと、小穂は前向きに考えた。

「晴久さん」瀬川が再び口を開いた。「私はただ、あなたが社長の息

子だからというだけの理由で、跡を継いでほしいと言ってるわけじゃないんです。あなたがバイトで工房に入ったとき、私はかばん作りのいろはを指導させてもらいましたが、センスは抜きん出ていました。教えながら、そのうちきつと自分よりうまくなると思ったのを、今でも憶えています。あのセンスがある人が率いるなら、かばん屋として間違った方向には行かないだろう、手仕事の価値を十分理解した、職人思いの社長になってくれるだろうと思うからです」

小穂の期待以上に、瀬川は熱く語ってくれていた。

「お言葉はありがたいんですけど……」

晴久は苦しげにそう口にするのがやっとだった。響いていると思った。しかし、それでも、三十年という歳月、父子のわだかまりから、簡単には首を縦に振れない状態に彼自身が縛られてしまっているのだ……小穂にはそう思えた。

「お時間いただいてありがとうございます。またご相談させてください」

結局、この日もいい返事はもらえなかったが、この状況を打開するには、時間に頼るしかないだろうという気がした。晴久もただ拒んだだけでなく、重い宿題を抱えてしまったように、悩ま^{おも}しげな面持ちで終わったように見えた。

帰り道、小穂は瀬川にも礼を言った。

「手応えはあったと思います。あと一押し、二押し、何とかがんばります」

目に見える収穫がなく、悔しさを顔ににじませていた瀬川も、小穂がねぎらいの言葉を送ると、気持ちを切り替えるようにして、「あとはよろしくお願いします」と頭を下げた。

晴久の気持ちは動いている……。

そんな手応えは確かにあったはずだった。

しかし、状況そのものは、時間を置いたところで、目に見える変化として現れてはくれなかった。

翌週は企画部長の原田、そのまた翌週は、専務の定村を連れて、晴久のもとに足を運んだ。

「この三十年で、ビジネスバッグも大きく変わりましたよ。昔は、同じようなブリーフケースが多かった。やっぱり、働き方の多様性、個人の嗜好性（しこうせい）がかばんにも反映されるようになってます。今、都心のオフィス街を歩くと、スーツでリュック（りゅく）背負（しよ）ってる人、老若男女問わず、いっぱいいますよ。やっぱり、スマホを使うには、両手が空いてたほうがいいですからね。スーツにリュックは合わないなんて価値観は、もうありません。じゃあ、スーツに合うリュックを作っただけじゃないってことです。これがまた、次の二十年、三十年で

どうなっていくかってことです。かばんの形もビジネススタイルに沿って変わっていくでしょうし、考えるだけでも面白いですよ……」

原田は彼らしく、晴久に社長を引き受けてほしいという思いなどは無理に口にせず、ひたすら、かばん作りの面白さ、彼が日々感じている刺激的な状況を熱っぽく語ることに終始した。

「私ももう、この歳になると、最後のご奉公と思つてやっているだけですね、もちろん会社に対する愛情はありますけれど、自分のしたいようにかき回そうというような思いは何もありません。ですから、宣言させていただきますよ。晴久さんが社長になったあかつき 曉には、いつまでも番頭気取りで居座るつもりはありません。会社の安定だけに身を砕いて、一年を目処めどに、身を引かせていただきます。これからは新しい時代です。晴久さんの思うように会社を引っ張っていかれたらいい」

自分のような老兵がいつまでもいては、晴久にもいい迷惑になってしまうと打ち合わせで語っていた定村は、口説き文句の代わりに、重大な決意を彼の前で口にしてみせた。

小穂は打ち合わせの中で、彼らが言いたいことを整理し、こういう形でどうかと提案するだけだったから、彼らの話は彼らの考えや熱意がそのままこもったものになっていた。それぞれに色があり、かたわらで聞いているだけでも心が動かされた。

しかし……。

四人を投入し、三顧さんこの礼ならぬ四顧の礼を尽くしても、晴久の首は縦には動かなかつた。理由を訊いてもはや、検討に値するようなものは返ってこない。無理だから無理という、理屈も何もない類のものだ。

「あと一週間だけ、考えていただけなんでしょうか。来週、最終的なお返事をいただき、それを社長に報告させていただきます」

晴久の断りの言葉に無理やりそんな留保をつけて帰ってきたが、小穂は次の週を迎えるのが怖くなっていった。

週が明けたその日、小穂は瑞季を連れて「二見鞆」に足を運んだ。結果は今週中にも出てしまうのだが、見通しはやはり厳しいということをそれとなくほめかして、二見にはその心づもりをしてもらっておいたほうがいいように思った。期待させるだけさせて、強く落胆らくたんさせるのはよくない。

これまで、晴久一本に絞っていただけに、ではどうするかということも、考え始めなければならぬ。

しかし、一方では、何か逆転の秘策はないか、二見と話すことでヒントを得られないかという、往生おうじやうきわ際の悪い思いもある。

「息子さんの交渉はどうだったんですか？」

行きのタクシーの中、瑞季が珍しく、この案件の進展を尋ねてきた。世間話として、何となく訊いてみたというような口調でもあった。

「それが、なかなか難しくくてね……」

小穂がため息混じりに見通しを話すと、瑞季は顔色を変えぬまま、「まあ、そうなりますよね」と感想を口にした。

「私は最初から難しいと思ってました」

悔しいが、今は何も言い返せない。

「二見靴」では、社長室で二見が待っていた。

肺の調子が思わしくなくいらしく、カートに乗せた酸素吸入器をかたわらに置き、鼻にチューブを付けていた。一カ月前と比べても、さらに頬の肉が削^そげてしまっているように思える。時折咳^せきこむ姿が痛々しい。

それでも二見は、小穂にさばさばとした笑みを向けてみせた。

「定村から聞いているよ。ちょっと厳しいってな」

「そうですね」小穂は、気まずい思いで肩をすぼめた。「ある程度はこちらの気持ちも伝わっていると思うんですが、返事として結果が出るまでには至っていないのは事実です」

「そうか……まあ、手を尽くして、そういうことなら仕方ないよな」

二見が言う。

「一応、今週、最終的な返事を聞かせていただくという話になって
ますので、晴久さんもまだ考えてはくださっていると思いますし、
何かあと一押しできるような手はないかとも思ってますが……」
「うん」二見は小さく相槌を打ってから、少し間を置き、穏やかな
声で続けた。「でも、もういいんじゃないかな」

「え……？」

「あいつもそれなりには考えただろう。それでも、やると言わない
んだから仕方ない。これ以上、追い詰めても、あんたもあいつも嫌
な思いしか残らなくなるんじゃないかな」

「私はいいですけど……」

不意に試合終了を告げられ、小穂は虚脱感きよたつかんに包まれながら、そう
口にした。

「もう十分だよ」二見は咳きこんでから続けた。「結果が出なかった
のは、あんたが悪いんじゃない。これはまさに、私の不徳の致すと
ころというやつだね。原因は私以外の何物でもない。あんたはよく
やってくれた」

小穂は唇を噛みか、ただ首を振った。何かほかにできたことはなか
ったか……そんなことをやはり考えてしまう。

「確かに私も残念には思うよ」二見は言う。「でも、晴久にばかりこ
だわっていても仕方がない。私自身、いっどうなるか本当に分からな

いからね。次に進んで、早いこと形を作らないと」

小穂がそれとなく切り出し、その流れも作っておかなければと思
っていたことを、全部、二見自身が気を遣うようにして進めてしま
う……そのことが何とも切なかった。

「次に進むということであれば、一つ、提案させていただいてよろ
しいですか？」

不意に、瑞季が満まんを持じしていたように口を開いた。

「何だね？」二見が眉を動かして彼女を見た。

「本来なら、名前を伏せておく段階かもしれませんが、この案件、
お急ぎのようですので、あえて実名を出させていただきます」瑞季
はそう話し始めた。「こちら、セレクトショップの「ファビュラス」
さんとお取引がありますよね？」

「確かに、うちの品を卸してるが……？」二見が、怪訝けげんそうな口調
ながら、そう答えた。

「私、大学が同窓の関係で、「ファビュラス」の中なか西社長と仲よく
させてもらっています。こちらが「ファビュラス」さんと付き合い
があるを知って、ちょっと前、中西社長とお会いしたときに、名前
は一応伏せながら、けれど、どこの会社か見当づけられるような言
い方で、あるかばんメーカーが後継者を探しているという話をして
みました。そして、「ファビュラス」さんのほうで経営者を立てるこ

とに興味があるかどうか訊いてみました」

瑞季がひそかにこんな案を温めていたとは、小穂はまるで知らなかった。呆氣あつけに取られる思いで、彼女の話聞いていた。

「その答えなんですけど、大いに興味があるということでした」

「中西社長が……？」二見が呟つぶやく。

「乗り気です」瑞季はうなずいて言う。「形としては、こちらを買収して子会社にし、「ファビュラス」の誰かを社長に据えるということになりますけど、会社の中をいじるわけではありませんし、実質的には、中西社長に、二見社長の後継者になりうる優秀な方を紹介していただくということと変わらないと思います」

二見が驚きを隠せないように目を見開いたままうなつた。

「ファビュラス」は、小穂もちろん知っている。比較的高級志向の品ぞろえで勝負している有名セレクトショップだ。中西社長がどんな人間かまでは知らないが、二見の反応を見ると、それなりに信頼を寄せている仕事相手には違いないようだ。

「中西社長が、うちのことを念頭にそういう話をしていたのは確かなのかね？」

「七十代の社長が入院していたかばんメーカーで、うちと付き合いがあるところは一社しかないっておっしゃってました」瑞季は言う。

「日本のかばんメーカーで、どこが欲しいかと言ったら、その会社

以外にないとおっしゃってました」

「そうか……」二見は感慨深げに言う。「彼がうちのことを高く評価してくれていたのは、もちろん知ってたよ。私の入院中、仕事のことで彼の意に沿えない返事をしたことがあってね。いろいろ残念だなと思っていたんだが、それでも、そう言ってくれるのは嬉しいな。

これも何かの縁ということかな」

「社長のほうも異存はないということでしたら、早急にも、お互いのご意思を確認する場を設定したいと思いますが……」

二見が自分の意思を確かめるように、一つうなずいた。

本命が見込み薄となり、どこへ向かうか分からなくなりそうになつていたこの問題が、呆気なく収まり場所を見つけようとしている。

二見の表情には、どこか安堵したような色が早くも覗いている。

しかし、小穂は戸惑ったままだった。現実の変化から取り残され、本当にそれでいいのかと問いかける気持ちがあった。

「待ってください」小穂は言った。「まだ、晴久さんの最終的な返事を聞いていません」

「鹿子さん」二見が諭すさとように小穂を見る。「気持ちは分かるが……」

…

これまで一生懸命やってきたから、簡単にはあきらめられない……自分はそんな気持ちでいるのだろうか和小穂は自らに問いかけ、違

うと思った。まだやり切っていないのだ。

「社長」二見に呼びかける。「社長は三十年前のことで、晴久さんに詫わびを入られたことはありませんか？」

二見は小穂をじつと見てから口を開いた。

「別れた妻と話し合う中で、お前も巻きこむことになって悪かったなどは言ったと思う」彼はそう言ってから、また考え、言葉を足した。「改まってというのは、なかったかもしれないが」

「晴久さんには、わだかまりが残ってます。社長は自分が直接会わないほうがいいとおっしゃってましたが、最後はやはり、社長自身が会われるべきだと思います」小穂は迫るように言った。「それで駄目なら、私もあきらめます。このままで済ませてしまうのは、社長にとつても晴久さんにとつても、不幸なことだと思います」

二見は考えていた。棚に置かれた晴久の作ったかばんをぼんやりと見やり、それから小穂に目を戻した。

「分かった。そうしよう」

彼は言った。

二日後、小穂は、二見と目黒の「スクイラル」に向かった。

タクシーの中でも、二見は苦しそうに咳きこむ姿が目立った。日常生活は看護師資格を持つ家政婦を雇って、諸々の面倒を見てもら

っているらしい。会社にいるのも日中の二、三時間がやっとで、この日は自宅マンションから直接、目黒に行くことになった。そうした体調面から考えても、事を起こそうとするのには、ぎりぎりの夕イミングだと言えた。

晴久には、この日に訪問することだけは伝えているが、会いたくないという返事の可能性があるゼロではない以上、二見を連れていくことまでは言っていなかった。

「ここか……」

「スクイラル」の前でタクシーを降りた二見は、その店構えを仰ぎ見て、感嘆するように、そう呟いた。二軒隣のカフェで待ってもらおうと思ったが、二見が店を覗きたがったので、彼の意思に任せた。

酸素吸入器を載せたカートを引きながら、二見はゆつくりと店に入っていく。足取りは弱々しく、小穂は後ろから、彼がつまずいて転んだりしないように見守りながら付いていく。

一階ではいつものように、女性スタッフが一人だけ出ていた。

「二階にいらつしやると思うんで、呼んできますね」

二見の身体で階段を上らせるのは酷だろうと思い、小穂は一人で二階に上がることにした。

二階では、奥のカウンターテーブルで、晴久がパソコンを開いて仕事をしていた。

小穂の会釈に気づき、小さく首を動かして応えた彼の表情には、ほとんど何の感情も浮かんではいなかった。小穂がただ単に今日、彼の最終的な返事を聞きに来ただけならば、その顔を見ただけで、もうその内容を理解しなければならぬものだった。

「こんにちは」小穂は彼に声をかけた。「お時間いただいて申し訳ありません」

「いえ」晴久は淡泊たんぱくに応じた。

「今日は最終的なお返事をいただくということですのでお願いしています
が、その前に、最後にもう一人だけ、会っていただきたい方がいら
っしゃいます」

晴久は困惑の吐息をついてみせた。

「私はもう返事を決めてますから、今日誰と会ったからって、何も
変わりませんよ」

「二見社長です」

そう言うのと、晴久の顔色が変わった。

「父が……？」

「下にいらっしゃってます」

「どうしていきなり……何も聞いてませんよ」

瀬川たちを連れてきたときも、小穂は誰それを連れていくという
ようなことは言っていない。しかし、二見はさすがに、瀬川たちと

は話が違うようだった。晴久は、まるで騙し討ちを受けたかのよう
に気色けしきばんでいる。

「いつものカフェに行きませんか？」小穂は構わず、そう誘った。

「行きません。話が違います。帰ってください」晴久は不愉快そう
な口調で言い放った。

「社長には、体調が悪いのを押して来てもらってます。ちょっとだ
けで構いませんから、会ってもらいたいです」

「そんなのは、そちらの都合でしょう。こちらの返事なら今、申し
上げます。私には私の人生があります。父に振り回されるために生
きてきたわけじゃありません。ですから、残念ながら、この話はお
断り申し上げます」

覚悟はしていたものの、あまりにも冷たい口調で放たれた返事を
聞き、小穂は泣きそうな気持ちになった。

「その答えで構いませんから、ちょっとだけ、会ってください」小
穂はぐっと感情を抑えながら言った。「社長はここまで上ってこれら
る体力ありません。お願いですから、下りてきて、顔を合わせて
あげてください」

「勘弁してください」晴久は首を振った。「会ってどうするんですか。
面と向かって断ったら、私がいじめてるみたいじゃないですか。私
が悪いみたいじゃないですか」

「そんなことは誰も思いません」

小穂はそう言ったが、晴久の強張った表情は変わらなかった。らちがあかない。

階段を上れるなら、二見を連れてくるが……しかし、無理にそうまでさせても、晴久の返事は断りでしかないなら酷というものだ。

小穂はどうすればいいか分からないまま、下で待たせている二見が気になり、階段の下を見た。すると、二見が酸素吸入器のカートを引つ張り上げ、手すりにつかまりながら、階段を上ろうとしている姿が見えた。

「社長！」

小穂は慌てて駆け下りた。

「どうせ、会いたくないと言ってるんだろう」二見は小さく笑いながら言った。「でも、どうせここまで来たんだ。ちょっと顔くらい見ても、罰は当たるまいに」

小穂は、酸素吸入器を持ち、彼の腰に手を添える。

二見はゆっくりと、一段一段、階段を上っていく。はあはあと呼吸が乱れている。立ち止まり、咳きこんでから、また一段上る。

小穂は、自分の頬を伝う涙を拭った。

彼はこうやって、自分の人生を清算しようとしているのだと思つた。三十年前、彼の家庭を壊した過ちがどんなものだったとしても、

その気持ちだけは伝わってほしいと思った。

時間をかけて、二見が二階にたどり着いた。

晴久が呆然ぼうぜんと立って、二見を見ていた。

「やあ」

二見は何ともさりげなく、晴久に声をかけた。それから息を落ち着けながら、店のフロアを見回した。

「いろいろ、しゃれた家具があるな……お前のおすすめのソファはどれだ？」

父の問いかけに晴久は一瞬、戸惑うように立ち尽くしていたが、やがて、「これです」と一組の黒革のソファを指し示した。

「ほう、なるほど……いい表情の革だ」

二見はそのソファに近づき、皺しわだらけの手で座面を撫なでた。

「外国の品か？」

「いえ……ミッドセンチュリー風にうちでデザインしたのを、大川おおかわの職人さんに作ってもらってます」晴久が訥々とつとつと答える。

「そうか、メイド・イン・ジャパンか」二見はどこか嬉しそうに言った。「座らせてもらっていいか」

二見はソファに浅く腰かけ、ふうと息をついた。

「うん……座り心地もいいな。鹿子さんも休ませてもらいなさい」

二見に促され、小穂も晴久に断って、黒革のソファに座らせても

らった。

「いい店だな」

二見に褒められ、晴久は決まりの悪そうな顔をしていたが、やがて意を決したように口を開いた。

「僕は僕で、この店を一生懸命やっています。だから、申し訳ないですけど、「二見鞆」を継ぐことはできません」

二見は呼応するようにうなずいた。

「そりやそうだろう」二見は言った。「見れば納得だ。来てみてよかった。うん……いい店だ」

すがすが
清々しい口調だった。

女性スタッフがお茶を運んできた。それに口をつけながら、今年高校生になるといふ晴久の子どものことで、二人は少し話をした。

「さて」二見が立ち上がった。「邪魔したな」

「いえ」

短く応えた晴久の顔は、どこか寂しそうでもあった。

「晴久」歩き出した二見がすぐに立ち止まり、顔を伏せてから晴久を見た。「お前にはいろいろ迷惑をかけた……悪かったな。許してくれ」

晴久は虚をつかれたように、ただ黙って父親を見ていた。

「母さんには向こうで言うよ。お前は元気でやりなさい」

今度は晴久が顔を伏せた。こみ上げてくるものを抑えるように、表情がかすかにゆがんだように見えた。

二見とともに階段を下りる。何も言わなくても、晴久は付いてきた。

店の前で小穂がタクシーを止めると、二見はちらりと晴久のほうを振り返り、「じゃあな」と言った。

「父さん」

晴久の声に、背を向けかけていた二見が再び振り返った。

「まだ夜は寒いから、身体に気をつけて」

「ああ」

「来てくれてありがとう」晴久はそう言うてから、小さく続けた。

「いい返事ができずにごめんなさい」

「お前が謝ることじゃない」二見はかすかな笑みを口もとに覗かせて言った。「気にするな。こっちは大丈夫だ」

通い合わない気持ち同士ではなかったのに……。

三十年の歳月をもう少しうまい形で埋められたら、違った結果があったかもしれない……そう思うと残念であり、小穂は自分の力不足を感じるしかなかった。

見送る晴久を残して、小穂と二見を乗せたタクシーは静かに発車した。

「目黒川を通ってくれないか」

振り返っても晴久の姿が見えなくなったところで、二見はタクシーの運転手にその声をかけた。思うような大きさの声にはならず、運転手が応えなかったので、小穂がもう一度、「目黒川を通ってください」と頼み直してくれた。

「少しは咲いてるかな」

テレビのニュースでは、東京でもちらほらと咲き出したと報じていた。

「開花宣言は一昨日くらいに出ましたよね」

小穂も、先ほどまでのことを無理やり頭から追いやったかのようにして、話を合わせてきた。

やがて、タクシーは目黒川にかかる橋に差しかけた。

「少し停めてもらっていいですか」

小穂がそう頼み、橋のたもとで歩道に寄せてもらった。

二見は小穂が座るほうに少し身体を寄せ、川沿いに枝を広げている桜の木を車窓から仰ぎ見た。

目に優しい薄紅色が、陽の光を受けてきらきら輝いている。まだほとんどがつぼみのようだった。

「あ……あれ、咲いてますよ」

一緒に外を眺めていた小穂が指を差す。

「お、本当だ……」

よく見れば、つぼみが綻ほころんでいる枝もちらほらとある。

今年は見られるかどうか分からないと思っていた。

「見られたな……」

二見は小さな花を眺めながら、そつと吐息を洩もらす。重たい荷物が肩から離れ、にわかになんか楽になっていく感覚だった。

「いい頃合じゃないか」

待つてもこのあたりまでと思っていた時期がここに来ていた。

「鹿子さん……悪いが、中西社長にお願いする方向でやってもらえるかな」

二見自身より、晴久を後継者とすることにこだわっていたように見えた——そんな彼女だったが、今は素直にうなずいてくれた。

「力及ばずで、申し訳ありません」

小穂がそう言って、頭を下げた。心から悔しそうだった。

「いや、ありがとう」二見は言った。「あんた、いい仕事を見せてもらった」

これほど清々しい気持ちにさせてくれた彼女に、本心からのねぎらいの言葉を送ったのだが、それが思いのほか心に染みたらしく、彼女は二見に向けた瞳を見る見る潤うるませた。

目を伏せて首を振った彼女の顔から、きらりと涙が散った。

それは咲き始めの花よりも美しく光り、二見の目を優しく打った。

5

年度が替わって桜が散り、それからまた月も替わって初夏の陽気に包まれた五月の半ばすぎ、二見が亡くなったという知らせが届いた。

「ファビュラス」に「二見鞆」を売り渡し、後継社長が内定したのを待つようにして、二見は旅立っていった。

葬儀は社葬として執とり行われ、葬儀委員長には「ファビュラス」の中西社長が就いた。喪主は晴久が務めた。

葬儀の日、小穂は式の時間より少し早く斎場を訪れ、晴久にお悔やみの挨拶をした。列席者には仕事関係者が多いようで、そういう相手には定村ら会社幹部や、あるいは中西社長ら「ファビュラス」の人間が応対に回り、晴久がやらなければならないような仕事はほとんどないようだった。

「こうやって生前、親交のあった方々の顔を拝見していると、今さらですけど、四十五年かけて築いてきたものの大きさってというのは、こういうことなのかなっていう気がしますね」

晴久は斎場に集まり始めている列席者の姿をぼんやりとした目で眺めながら、そんなことを言った。

「鹿子さん……あなたは、私が最初からもう答えを決めてしまっていて、何を言っても聞かない人間だと思ったかもしれない」

晴久は心の内を吐露^{とろ}するように話し始めた。

「でも、本当はずっと気持ちが揺れ続けて、私なりに悩み抜いたんです」

彼の気持ちが動いていたという手応えは、確かにあったのだった。

しかし、それを突き崩すことは最後までできなかった。

「時間が足りませんでした」

小穂がぽつりと言うと、晴久は小さくうなずいた。

「父の過ちがどんなものであるかと、何十年も前のことをいつまでも言っているのはおかしいという気持ちもありました。ましてや、私とのことじゃなく、父と母の間のことです。もしかしたら、母が生前一言でも、もう許すと口にしていたら、話は違っていたかもしれない。でも、そうではないのに、寂しく死んでいった母を脇に置いて、私の一存で簡単に許すと言っていいのか……そんな思いも一

方ではありません。ただ、どちらにしても、これは私の問題だったんです。それに、家庭の問題と仕事の話は、また別物です。父が長年にわたって築き上げてきたものは、やはり、たやすく手放しているものではないということも、分かってはいました。だから、悩んだんです」

晴久は一つ吐息をついてから続けた。

「今でも、自分の出した答えが正解だったのかどうかは、よく分かりません。心の大きさなのか勇氣なのか、それとも鹿子さんが言うように、単なる時間なのか……何かが足りなかったから、こういう答えになったんでしょう。これでよかったのかどうか……たぶん、これからも私は、それを考えていかなきゃいけないような気がしています」

「二見鞆」の新社長は、「ファビュラス」のバッグ部門のチーフバイヤーで執行役員も務めていた、伊藤正仁いとうまさひとという男が就くことになっている。小穂も交渉の最中、中西社長に紹介してもらったが、かばん業界に精通している上、意欲も十分で、別のルートで知り合っていたら小穂自らキャンディイトにしたらと思うほど、文句のない人材だった。二見も、伊藤とはもともと仕事の上で面識もあったようで、社の行く末を案じていた身としては、心から安堵できる結果となったようだった。

それでも小穂の中には、もう少し現実が噛み合うように動いている。別の結果もあったはずだという、ほろ苦さが残っている。

晴久の、こんな吐露を聞くと、なおさらそうだ。

苦いなと思う。

「鹿子さん」

告別式が終わり、斎場を出たところで、「ファビュラス」の中西社長が声をかけてきた。

「このたびはいろいろお世話になりました。二見社長の遺志を受け継いで、これからも「f t m」のブランドを大事に守っていきたいと思います」

中西はそんな挨拶をしてから、「あちらのバッグはご覧になりましたか？」と、ロビーの一角へと小穂を連れていった。

そこには、革のバッグがいくつか、テーブルに飾られていた。来たときには、先に観賞している人たちがいて、じっくりとは見られていなかった。

「二見社長が作られたバッグなんですかね？」

「ええ、職人としても一流ですよ。感服かんぷくします」

中西はそう言うてから、端にあった茶革のトートバッグを手に取った。

「あ……」

中西が説明する前に、小穂はそれが何かを悟った。紳士物のバッグが並ぶ中、そのバッグには装飾として、同じ革で作られたリボンが付いていた。

『鹿子さんへ』と書いた紙が貼ってありました。どうぞ、お持ち帰りください」

小穂は中西からそのバッグを受け取った。

紳士かばんと比べると、フォルムには丸みがあり、何とも言えない愛嬌あいせうがある。大きさは小穂が使っている「フオーン」のトートと同じくらいで、使いやすそうだ。日々弱っていく身で、いろいろ考えて作ってくれたのだなと思う。

いい仕事を見せてもらった……。

そんな二見の言葉がよみがえる。

こちらこそ……小穂はほろりとしながら、胸の中で呟いた。

夕方、オフィスに戻った小穂は、瑞季しづせきの執務室しつむしつを覗き、外せないアポがあるということで二見の葬儀には出席しなかった彼女に、簡単な報告をしておいた。

「今回の件は、細川さんに助けられました。いろいろありがとう」
実際、彼女が中西社長とのつながりで解決策を持ってこなければ、

社長探しはもっと難航なんこうし、二見の生前にはまとまらなかったかもしれない。そう思うからこそ、小穂は率直そつちよくに、感謝の気持ちを口にした。

瑞季は、小穂の口からそんな言葉が出てくるとは思っていなかったのか、最初は真意を訝いぶかるような視線を向けてきたが、他意はないと分かったらしく、すぐに余裕めいた色を取り戻した。

「いえ、こちらこそ、いろいろ勉強になりました」

勝ち誇ったような口調だったが、それを意識すると、ほろ苦さがぶり返すような気がして、小穂は聞き流しておいた。

「これ、二見社長が作ってくれた名刺入れ」

そう言つて、バッグと一緒にもらつてきた革の名刺入れを彼女に差し出した。

「あ……」

もしかしたら、大した感慨もない素振りで、淡々と受け取られてしまうのかなと思っていた。

しかし、瑞季は、思いがけないものを見たように束の間絶句し、それから、「本当に作ってくれたんだ……」と静かに呟いた。

小穂からそれを受け取った彼女は、手触りを確かめるように撫なでてから、小さくうなずいた。

「大事に使います」

彼女がそう口にした瞬間、その名刺入れは、新人ヘッドハンターの門出を祝う品となった。

よかった……。

あの社長、本当にいい仕事をするな……小穂は、自分の中にあつた苦みが少し消えていくのを感じながら、そんなことを思った。

〈つづく〉